

# 遠藤周作の『わたしが・棄てた・女』論

— <悲しみへの連帯感>を中心に —

陸根和\*

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. 作品の構成
  3. 作家の実体験
  4. 作中人物への考察
    - 4-1. 偶然の出会い
    - 4-2. <吉岡>の場合
    - 4-3. <森田ミツ>の場合
  5. おわりに
- 

## 1. はじめに

一生をカトリックの唯一の神を探り續けてきた遠藤周作の文學には二つの系譜がある。一つは、『白い人』『黄色い人』『海と毒藥』『沈黙』『深い河』などにいたる「純文學」的小説作品群であり、もう一つは『おバカさん』『へちまくん』『わたしが・棄てた・女』『女の一生』などの、いわゆる「大衆文學」的な輕小説と稱される作品群である。

しかし、遠藤文學において「純文學」と「大衆文學」という区分は、果たしてどういう意味合いを持っているのだろうか。勿論、辭典的な意味としての「純文學」は、主に小説を中心にした興味本位の大衆文學に對し、純粹な藝術を志向する文藝作品をさしている。だとすれば、遠藤の「大衆文學」に屬する作品は、興味本位に重點をおき、純粹な藝術の世界は軽く扱われていることになるのか、大いに疑問である。

何故なら、遠藤の作品世界では、「純文學」・「大衆文學」を問わず、カトリック作家としての一貫したテーマ—<日本人にとっての神の存在>と<日本におけるキリスト教>—が探り求められているからである。それは、普遍的なカトリック精神に基づいた母性的な「愛

---

\* 大田大學校 日語日文學科 副教授 日本近現代文學

の神の存在証明」にほかならない。だから、遠藤文學を正當に理解するためには、新聞や婦人雑誌などの外見的な要素—氣輕で柔らかな文體や馴染みやすい作品舞臺の設定など—に拘らず、作品の根底に流れているテーマが何であるかを把握することが大事であると私は思う。

中でも、『わたしが・棄てた・女』は、最初の新聞小説として出發を告げた『おバカさん』や他の「大衆文學」に屬する作品の重點的なテーマが、より鮮明に浮き彫りにされており、見逃すことのできない作品であると言える。

本稿では、二人の主人公<吉岡努>と<森田ミツ>が繰り廣げる作品世界を分析し、遠藤が追求し語ろうとしたテーマがどのように描かれているかを探ってみたいと思う。

## 2. 作品の構成

作品『わたしが・棄てた・女』<sup>1)</sup>は、1963年1月から12月にかけて「主婦の友」に十二回連載され、1964年3月、文藝春秋新社より單行本として刊行された。この長編小説は、結核再發のために1960年から二年半にわたる入院生活から再起した遠藤が、最初に取り組んだ作品である。死と向き合った病の後の著述なので、本作品には作家の特別な感懷が溶け込んでいるであろうと思われる。

この小説は、主人公<吉岡努>の一人稱で書かれた「ぼくの手記」と、もう一人の主人公<森田ミツ>を客觀描寫した「手の首のアザ」が組み合わされて展開する。しかし、冒頭の一カ所だけは、作家が直接讀者に語りかけ、讀者を作品の世界に呼び寄せる効果をあげている。

男やもめに蛆がわく……

むかしから言われてきた言葉だが、愼みぶかい讀者姉妹(=みなさん)はまさか、若い青年二人の下宿を、のぞかれたことはありますまい。彼等がいかに物ぐさで、その住む部屋がいかに亂雜で、臭氣にみちているかをじかにかいで見たこともありますまい。

しかし、貴女にもし、遊學されている愛すべき兄弟、戀人がおありなら、ある日、突然、その下宿を奇襲されることをお奨めしましょう。襖をあけられた途端、あなたは、

「まア。いやッ。」

顔をあからめ、絶句なさるにちがいない。(p.7)

この文章の次は「この物語は、戦争が終って三年後の二人の若者の下宿からはじまるの

---

1) 『わたしが・棄てた・女』のテキストとしては、講談社 1975.9 刊行使用。

だが、」になっており、本格的に<吉岡努>の「ぼくの手記」が書かれている。婦人雑誌という読者層を意識した大衆文学の特徴でもある親しみやすい文章の調子は、作品の終りまで変わらずに保ち続けられている。しかし、婦人雑誌とはいえ、「読者姉妹」のルビが「みなさん」になっているのは、男性を含む諸読者を念頭においてのことであろう。

作品世界は、第二次世界大戦が終わって三年目の1948年の秋から1952年1月末までの東京周辺—新宿・澁谷・お茶の水・五反田・川崎・御殿場など—が舞臺になっている。大学生の<吉岡努>はアルバイトで貧乏暮らしの下宿生活を何とかささえていたが、ある日アルバイト先で偶然拾った「明るい星」という古雑誌の読者通信欄を讀んだことがきっかけで、「映畫が大好きな19歳の平凡な娘」森田ミツと知り合いになる。工場勤めのミツは、人の不幸をみるとほっておくことができない優しい心の持ち主である。<吉岡>に體を許してしまったのも、小兒麻痺の後遺症を持っている彼への憐憫の情からである。たった二回目の逢引で<ミツ>の純潔を奪い、それっきり棄ててしまった<吉岡>は、「そんなこと、男ならだれでもできること」と思う男である。

<吉岡>は卒業後、釘問屋に就職し、出世を願う下心も働いて、美しさもそなえた社長の姪<三浦マリ子>と結婚する。手がたく幸せを攔んだ<吉岡>とはうらはらに、<ミツ>は、工場をやめさせられ、トルコ風呂から酒場へ、さらにハンセン氏病病院へという悲惨な生き方のあげく、交通事故で死んでしまう。

このような内容をもった『わたしが・棄てた・女』の作品構成は、「ぼくの手記」の章が(一)から(七)まで、「手の首のアザ」の章が(一)から(五)まで、合わせて十二章からなっている。その配置は、「ぼくの手記」(三)と(四)の間に「手の首のアザ」(一)が、「ぼくの手記」(六)と(七)の間に「手の首にアザ」(二)から(五)までがおかれている。敘述は、現在形で進められているが、(一)の末尾や(二)の冒頭などは回想という形式を取っているところもある。

作品内容の展開に沿って区分するならば、四部に分けることができる。第一部は、<吉岡>と<ミツ>の出会いから別れまでを記した「ぼくの手記」(一)～(三)と、「手の首のアザ」(一)の部分まで、第二部は、<吉岡>が大學卒業後、就職し、後に妻となる<マリ子>と交際を始める一方、時折<ミツ>のことが氣にかかるという内容の「ぼくの手記」(四)～(六)まで、第三部は、<ミツ>の御殿場のハンセン氏病病院での生活を描いた「手の首のアザ」(二)～(五)まで、第四部は、<吉岡>が<マリ子>と結婚し、御殿場の病院にいる<ミツ>に出した年賀狀に對する、修道女<山形>からの返信によって、<ミツ>の辿った運命を知る最終章の「ぼくの手記」(七)にあたる部分である。

このような分析に沿って考察してみると本作品の構成は、親しみやすい文章をもって二つの物語を巧みに組み合わせ、現在の視点で語り続け、時折回想の部分もまぜているという興味深い變化を成し遂げていると言える。

かかる巧みな作品構成は認められるものの、描かれた作品世界は、世間竝の主人公と現

在の生活の場である東京、その有り觸れた通俗的な内容を考えると、遠藤の純文學にみられる一貫したテーマとは関連がないように思われがちである。

それでは、遠藤は、この平凡な作品世界でどのように彼の追求しようとするテーマに近づいたのであろうか。それを跡付けるために、作品世界と深い関連のある作者の実体験を調べたうえで、論を深めていきたいと思う。

### 3. 作家の実体験

小説というのはもともと虚構の世界を描くものなので、一般的に作家の実体験と作品との関わりを探ることはあまり意義のないことかもしれない。しかし、「作品の登場人物は作家を越えることができない」という遠藤の言葉のように、『わたしが・棄てた・女』においては、作家の二つの実体験が大きな影響を及ぼしたことは確かである。

その一つは、学生時代の「ハンセン氏病病院の訪問」であり、もう一つはフランス留學時代の「フランソワーズとの戀愛事件」である。

遠藤の「ハンセン氏病病院の訪問」は、カトリック学生寮の白鳩寮時代に寮の行事として行われたそうである。慰問という形をとっているものの、ハンセン氏病患者の前で怯えている自分自身に嫌惡の念を押さえることができなかつたその日のことを、エッセイ『ハンセン氏病病院』の中で物語っている。<sup>2)</sup>

我々寮生はある春の日に、故岩下師が院長だったというこの御殿場の病院に行った。一晚、泊めてもらって翌日、歸ったのだが、その間中、私は自分が癩にならぬかと怖れ、その怖れる自分をひどくイヤな人間のように思っただおぼえがある。私は他の寮生の心理に偽善を感じ、また、臆病な自分を卑怯だと思った。寮生は患者と野球をやりだし、私もピンチ・ヒッターにさせられたが、二壘と三壘の間にはさまれて思わず、足がすくみ立ちどまってしまった。追ってきた患者は、球を私につけるのをやめて、小さな、静かな聲で、

「お行きなさい」

と言った。そのしずかな聲は私の心をひどく責めた。

遠藤は、「お行きなさい」という聲が忘れられなかつたようで、その日の「イヤな自分」に

2) 遠藤周作文學全集第十二卷 評論・エッセイ I 『ハンセン氏病病院』新潮社 p.328

この内容については、「近代文學」1964年1月號に『ハンセン氏病病院』と題して發表。以後、1989年4月、文藝春秋社刊行『春は馬車に乗って』(『ハンセン氏病病院』と改題) 1992年4月、文春文庫刊行『春は馬車に乗って』に収録された。

ついて作品『死海のほとり』の中にも詳しく描き出している。しかし、エゴイストの自分とは正反対に、ハンセン氏病の患者のために一生をささげた實在人物の女性がいたことは、作家に大きな感動を與えたにちがいない。この女性に関しては、劇團音楽座による『わたしが・棄てた・女』のミュージカル版「泣かないで」のパンフレットの中で、次のように記している。

まだ學生だった頃、御殿場の復生病院に二度ほど見舞いに行きました。復生病院には、當時は不治だったハンセン氏病の患者が、ひっそりと暮しておられたからです。

この病院には、ご自分も同じ病氣にかゝられて入院されましたが、誤診とわかり、大喜びで御殿場の驛まで戻られた一人の女性がいました。

彼女は汽車に乗ろうとした瞬間、突然、頭の中を横切る聲を聞きました。

その聲を聞いたあと、その女性は鞆をもって、ふたゝびもと来た道を病院に戻り、生涯を患者達の看護にあたられたのです。

ここに出てくる實在の女性とは、この病院の初めての看護婦として、70年もの長期にわたって獻身的に生きた井深八重のことである。彼女は、1897年舊會津藩家老という名家に生れ、同志社女學校を卒業して長崎高等女學校の教師となり、縁談の話ももちあがっていた22歳のとき腕にできた濕疹をハンセン氏病と診断され、富士山麓にあるカトリック系ハンセン氏病病院の神山復生病院に隔離・入院させられ、それまでの人生のすべてを捨てて堀清子という名で生活を始めることを強いられる。それが一年後に再検査の結果、誤診と判明する。しかしその後もその病院にとどまり、看護婦となって生涯をハンセン氏病の患者の治療と看護に盡くし、1989年に92歳の生涯を閉じている。<sup>3)</sup>

遠藤は、かかる稀有の體驗をした女性の絶望や苦しみ、さらに新たな人生への道に辿り着いた過程を、作中人物<ミツ>に託して描き出している。しかし、<ミツ>は、この實存の女性を念頭において作られたのであるが、その生い育った境遇やその後の生き方などにおいては大きな相違があることは、指摘しておいたほうがいだろう。

次に、遠藤の「フランソワーズとの戀愛事件」については、彼の死後發表された『滯佛日記』を通して詳しく知ることができる。<sup>4)</sup> フランスの女性<フランソワーズ>との関係をハッキリ記したところだけを抜粋してみよう。

3) 遠藤周作文學全集第十二卷 評論・エッセイ I 『わたしが・棄てた・女』(解説引用)新潮社 2000.4 p.225

4) 遠藤周作文學全集第十五卷 日記・年譜・著作目録 『滯佛日記(一九五二年九月～一九五三年一月)』新潮社 2000.10 pp.225-256

初出『ルーアンの丘』(PHP研究所 1998.9)に「滯佛日記(一九五二年九月～一九五三年一月)」として収録。著者が『作家の日記(一九五〇年六月～一九五二年八月)』(作品社 1980.9)の刊行の際に公表を控えたフランス留學時代の最後の5ヵ月間のこの日記は、著者の一周忌(1997年9月)の後、遠藤順子夫人によって著者の書齋で発見された。

\* 一九五三年一月×日

フランソワーズが来た。ジャン・ルイ(フランソワーズの婚約者:筆者注)との関係は悪化しているといった。

八時の面會終了時間までぼくたちはぼくらの將來が一緒に交わる計畫をした。ぼくは病氣がよくなったら、外國に彼女をつれて行こう。

\* 一九五三年一月八日(木)

こうして、ぼくの運命は決まった。(結婚の承諾:筆者注)ぼく等はキャフェ・リラを出、シテに行く間の車でぼくとフランソワーズは抱きあったまま、じっとしていた。

\* 一九五三年一月九日(金)

ホテルにかえり、ぼくはルミフォンを飲み、ピジャマに着かえてねた。

フランソワーズはぼくのベッドにこしかけ、大きな目でぼくを眺めていた。

「おはいり」とぼくはいった。彼女は素直にはいった。その従順さ、子供のような信頼さがぼくを罪から、あの肉欲から救った。

ぼくは彼女を犯さず、彼女はそれから一時間後に自分の寢室に戻った。

\* 一九五三年一月十二日(月)

朝、お前と二人でベッドで朝食をとった。

それから二人で、港外の海にある暗窟王の島をモータ・ボートで遊ぶ事にした。

その小島、地中海の光のふり注ぐ小島でぼくたちは手をつなぎ、石ころの多い斜面を下り、冷たい海のたわむれる岩の岸辺で石をひろって遊んだ。青い海の白舟が見える。突然、ぼくの心には一杯の悲しみが胸を充たした。フランソワーズ。お前は未だ子供すぎる。

お前は、あたかも明日がないように遊んでいる……(『滯佛日記』pp.250-256)<sup>5)</sup>

この日記でわかるように、遠藤には、結婚まで考えたフランス人の女性フランソワーズがいた。彼女は、著者より7歳年下(1930年3月23日生れ)で、父親は陸軍士官で三人姉妹の末娘である。遠藤に會ったのは、ソルボンヌ大學在學中の學生であった1952年10月(22歳)だが、二人が戀愛関係になったのは翌年1月になってからである。遠藤は、1月12日には結婚のため、マルセイユまで同行したフランソワーズと別れ、歸國の途についている。遠藤は、歸國した1953年にはフランソワーズに「ぼくらは結婚するだろう」「君を愛している」という手紙を頻繁に出しているが、翌年の1954年には二通、55年には一通を出したのみで、音信を絶つ。フランソワーズは、その間、遠藤との再會と結婚を待ち續け、東洋語學校に通い、日本語を學ぶが、1956年に日本人の知人から、彼が1955年にすでに結婚した事實を知り、恐るべき衝撃を受け、健康を害している。

5) 作家遠藤の戀人、フランソワーズについて知り得る資料は、遠藤周作の『滯佛日記』(「ルーアの丘」収録 PHP 1998.10)、遠藤順子夫人によるコメント「遠藤周作『滯佛日記』の眞實」(「新潮 45」1998.10號)、ジュヌヴィエヴ・バツトルによる「妹フランソワーズと遠藤周作」(「三田文學」秋季號 1999)である。

それから三年後の1959年11月に、順子夫人をともなってフランスを再訪した著者は、フランソワーズと再會し、その後、文通を再開する。フランソワーズは1965年には團體旅行で日本を訪れ、翌年にはフランス語講師として來日し、68年まで札幌大學で、同年からは獨協大學で教える。しかし、70年の春には乳癌のため二度手術を受けるが、すでに手遅れで、8月に歸國した後、翌71年4月死去、享年41歳であった。<sup>6)</sup>

遠藤が、文學的生涯を通して、「愛とは棄てないこと、罪とは他人の人生を歪めてしまうこと」と語りつづけてきたことや、『わたしが・棄てた・女』の「人間は他人の人生に痕跡を残さずに交わることはできない」といった言葉には、この青春時代のフランソワーズとの戀愛體驗が投影されていることは間違いないことであると言える。<sup>7)</sup>

## 4. 作中人物への考察

作家の實體験が色濃く投影されたと思われる『わたしが・棄てた・女』には、どのようなテーマが語られているのだろうか。本章では、作品の二人の主人公<吉岡努>と<森田ミツ>の生き方を追いながら詳しく考察してみよう。

### 4-1. 偶然の出会い

同じ大學の<長島繁男>と二人で下宿生活をしている<吉岡努>は、學校にはあまり顔をみせず、アルバイトで忙しい毎日を送っている大學生である。戦後三年目という事情もあって貧しい田舎の親からの仕送りはほとんど當てにならないからである。彼がどういう大學に通い、どういう學問をしているかはまったくわからないが、貧乏暮らしの中でも「ゼニコがほしい、オナゴがほしい」という切實な願望を持っている人物である。

6) 前掲書 遠藤周作文學全集第十五卷『滯佛日記』の解説参照 pp.390~391

遠藤周作とフランソワーズとは、始めて會ってから三ヶ月、戀愛關係になってから一週間から十日ほどの戀であったが、フランソワーズは、純粹な青春の愛をひたむきに遠藤に向けている。運命の出会いはいは残酷すぎ、彼女の死までもたらしたのである。

7) ジュヌヴィエヴ・パストル「妹フランソワーズと遠藤周作」『三田文學』秋季號1999 pp.136-157

フランソワーズの姉のジュヌヴィエヴ・パストルは、遠藤を三點において批判している。第一點は、當然のことながらフランソワーズを裏切ったこと、第二點は、より大きな過ちは裏切りをすぐに傳えず、フランソワーズをして自ら人生の道を歩ましめなかったこと、第三點は、人生の最後の死を迎える瞬間までも、見捨てられたと思わせたポール・遠藤の冷酷な行爲である。男女の戀愛關係には第三者が計り知れない色々な要素が絡み合っているものの、「愛の文學」といわれる遠藤文學の研究者として、心が沈んでくるのはいかんともしがたい。遠藤文學史上の問題として、今後研究を加えていかなければならないと思う。

＜吉岡＞は、スワン興業社というあまりまじめでない会社のチラシ配りのアルバイト中、誰もいない農家の庭に落ちていた古雑誌をなんとということなしに拾ってしまう。それは、散髪屋の待合室などで、頁が切れたまま積み重ねてある映畫の人気スターや流行歌手の寫眞などを満載したものである。＜吉岡＞は、學校にも行かず退屈しのぎにその雑誌をめぐりながら、「寂しい人間には偶像が必要なのだ」「友情は雨の日の水泡のようにたやすく生れ、たやすく消える。愛だって同じことなのかもしれないな」という呟きのなか、偶然讀者欄に目がいく。そこには「映畫の大好きな十九歳の平凡な娘。若山セツ子さんのファンならお便りお待ちしておりますわ。東京都 世田谷區經堂町八〇八」という文と一緒に＜森田ミツ＞という名前が記してあった。＜吉岡＞は、「女の子がほしいなら、どんな女の子でもいいじゃないか」という心境で、＜ミツ＞に葉書を出し、會う約束をする。

二人の主人公の出会い、このように偶然の出來事によって始まるのである。これについて作者は＜吉岡＞の口を借りて次のように語っている。

これがぼくがあの女を知った切掛だ。やがて、ぼくが犬ころのように棄ててしまったあの女との最初の切掛だ。偶然の切掛と考えるならば偶然かもしれぬ。しかしこの人生で我々人間に偶然でないどんな結びつきがあるのだろうか。人生はもっと偶然というやつが働いている。長い一生を共にこれから送る夫婦だって、始めはデパートの食堂でお好みランチを偶然、隣りあわせにたべるといふ、詰まらぬ出來ごとから知りあったかもしれないのだ。だがそれが詰まらぬことではなく、人生の意味の手がかりだと知るためには、ぼくは今日まで長い時間をかけたのである。ぼくはあの時、神さまなぞ信じていなかったが、もし、神というものがあるならば、その神はこうしたつまらぬ、ありきたりの日常の偶然によって彼が存在することを、人間にみせたのかもしれない。理想の女というもの現代にあるとは誰も信じないが、ぼくは今あの女を聖女だと思っている……。 (pp.25～26)

作者は早くも、最初の「ぼくの手記」(一)から、「神」とか「聖女」という言葉を露に使いながら、大膽に本作品のテーマに觸れている。このような直接的な表現は、遠藤の他の作品ではあまり見られない稀な手法であると言える。何故なら、遠藤は信者ではない一般の讀者のため、カトリック作家としてのテーマを表すには、きわめて注意深く隱喩的な表現—雪、雲、海、悲しい動物の目など—を使うからである。

この文章には、＜吉岡＞の心像がよく語られているので、本作品の正しい理解のためには見逃すことのできない肝心なところであると考えられる。特に、「人生で我々人間に偶然でないどんな結びつきがあるのだろうか」「詰まらぬ出來ごとから知りあったかもしれないのだ。だがそれが詰まらぬことではなく、人生の意味の手がかりだと知るためには、ぼくは今日まで長い時間をかけた」「神というものがあるならば、その神はこうしたつまらぬ、ありきたりの日常の偶然によって彼が存在すること」「ぼくは今あの女を聖女だと思ってい

る」という内容の流れは、<吉岡>の心像だけではなく、これから展開される作品の荒筋までも簡潔明瞭に暗示したものである。

結局、作品での事件の発端を告げる<吉岡>と<森田ミツ>との出逢いは、我々の人生がそうであるように、偶然の中の必然性によるものであり、そこにはひそかな神の働きが作用しているという意味を内包していると言えよう。

## 4-2. <吉岡努>の場合

『わたしが・棄てた・女』の主人公<吉岡>は、作品の始めから終わりまで語り手として<森田ミツ>を寫し出している。だから彼の作品構成上の主人公としての役割は、非常に重要な位置を示している。

作品の中で<吉岡>の性向を克明に現わしているところとして、三つの場面を挙げることができる。第一、初めての逢引で<ミツ>を旅館に誘引する場面、第二、<吉岡>が再び<ミツ>に会いに行く場面、第三、ハンセン氏病病院に手紙を出す場面、である。

先ず、第一の場面から調べてみよう。これは、初めての逢引で<吉岡>が<ミツ>を旅館に誘引するところである。

「君のこと、スキになったよ」  
「入ろうぜ。」  
「イヤ。こわい。こわいよ。」

口からは出まかせの言葉が次から次へと出てきた。あれはぼく自身の言葉というよりは、すべての男が自分のメタンガスのように黒く泡だつ情欲でつくる言葉だった。いいじゃないか。好きになった者どうしが一緒に泊ったってどこがわるい。好きだから君の體がほしいんだ。コワくないさ。コワイことなんかなに一つしない。ぼくを信じないのか。それじゃあ、なんのために今日、來たんだ。君はぼくがそんなにきれいなのか。ぼくにだかれるのがそんなにイヤなのか。(pp.41-43:抜粋筆者)<sup>8)</sup>

この場面は、<吉岡>の本性を克明に表わしているところである。要するにこれは、すべての男が愛してもいない女の肉體を取ろうとする時、使う言葉であるが、吉岡自身は、罪の意識どころか、頑固に拒否する<ミツ>に本音から腹を立てているのである。<ミツ>

8) <吉岡>は、この次にもでたらめな話を續けている。テキスト p.43

「第一、處女にこだわるっていうのは反動的な古い考えだぜ。大學の女子學生なんか進んで處女をすてるからな。そんな詰まらん習慣にこだわるからいつまでも日本の女性は進歩しないんだ。」「大學ではよオ……男女が同權であるためには愛情さえあれば古くさい純潔カンなど捨てて、捨てられて教えてるんだぜえ。わかるかい……」

はあれほど旅館に入るのを拒んだのに<吉岡>が小兒麻痺の體のことを少し誇張して言っただけで、「凍雪が溶けるように」溶けていったのである。だから二度目の逢引きでは<ミツ>のもろい部分を利用し、抵抗をうけることなく旅館に連れ込むことができる。<吉岡>は、<ミツ>のこういう行動を「安手の憐憫と安手の同情」と「鼻持ちならぬ感傷癖」としか受け取らない。

問題は、男性ならこういう行爲を、周りにどこにでもいるような平凡な男の行爲として受け取るという点にある。だから「すべてがあっけなく終わった」後、<吉岡>は「残酷な快感」さえ感じながら子犬を捨てるように<ミツ>から消えてしまうのである。無知な女を誘惑し、捨て去るというのも男の青春の自慢話になるのだから、この小説は、男性の読者にも違和感なく、共鳴を感じさせるに違いないだろうと思う。

第二の場面は、<吉岡>が犬ころのように捨ててしまった<ミツ>に再び会いに行く場面である。<吉岡>は、社長の姪<マリ子>という戀人をもちながら、その戀人の肉體に觸れようとせず、欲望のはけ口を商賣の女に見出す。しかし、娼婦の家から出たところを、會社の同僚の<大野>という男に見られてしまう。その後、會社内での位置も危うく、お金までせがまれる状態になる。そこで、<吉岡>の思いついたのが、今後自分の人生とは何の関係もないと忘れていた<ミツ>の存在なのである。

突然、ぼくの心にあのミツの、馬鹿みたいな、人のよさそうなわらい顔がうかんできたのだ。あいつはまだ、俺に惚れてるかもしれない。もし、そうなら、今後、赤線に行くかわりに彼女をだけばいい。足のみじかい、ずんぐりした彼女の胴體だが、どうせ赤線の女の體だってそれと大差あるわけではない。

そう思うとぼくは今日一日、憂鬱だった気分が幾分、晴れてくるような気がした。

(p.138)

<吉岡>は、<大野>に見られたのは自分のウカツだったと後悔し、これ以上<大野>に、人の弱點におぶさるまねはさせない、もう赤線などには近寄るまいと決心するのである。しかし、今後、赤線に行かぬとすれば、どういうふう to 若い欲望を處理するかで悩んでしまう。思いきってマリ子にいいよるかとも思ったが、萬が一でも、彼女から輕蔑をうけたら大變だし、社長を始め上司からどういう眼で見られるかが一番心配である。彼も恥の文化の「世間の目」だけが氣になる人だからである。<吉岡>は、「人生には人がよいだけで、坂道の傾斜をわざわざころげる連中がいる。不器用で要領がわるくて、損得の觀念が結局よくつかめぬ連中だ。ミツはきっとそんな一人なんだろう」と思い、頭のなかでは、<ミツ>を利用することばかり考えている。

<吉岡>は、<ミツ>の行方を追っ掛けて、彼女がトルコ風呂から移った酒場にまで探し

に行ったが、<ミツ>は病気で休みである。病気という話を聞いた瞬間、<吉岡>の耳もとで誰かが彼に問いかけるような錯覚に捉われてしまうのである。

(ねえ、君があの日、彼女と會わなかったら)と、その聲は呟いた。(あの娘も別の人生を—もっと幸せな平凡な人生を送ったかもしれないな。)

(俺の責任じゃないぜ。)とぼくは首をふった。(一つ一つ、そんなこと気にしていたら、誰とも會えないじゃないか。毎日を送れないじゃないか。)

(そりゃそうだ。だから人生というのは複雑なんだ。だが忘れちゃいけないよ。人間は他人の人生に痕跡を残さずに交わることはできないんだよ。) (p.150)

この文章の「人間は他人の人生に痕跡を残さずに交わることはできない」という言葉は、この小説の主題の一つであり、作家遠藤の青春時代の経験からでたものであると思われる。<吉岡>は酒場の女に自分の住所を残しく<ミツ>に伝えてくれるように頼んでいる。人間の心にははっきりした一つの顔だけが内在しているのではないが、住所を残した<吉岡>の心理にはなにが渦巻いているのだろうか。そこにはまだ<ミツ>を利用したい気持だけが強く残っているのであろうか、そうじゃなければ「彼女と會わなかったら、あの娘も別の人生を—もっと幸せな平凡な人生を送ったかもしれない」という心の痛みもあったのだろうか。

しかし、翌日からの<吉岡>の行動を見ると、<ミツ>への心の痛みが少しはあったとしても、それは一瞬の感傷に過ぎないものであることがわかってくる。次の日から<吉岡>は、「世間の目」への恐れも、<ミツ>への氣掛かりも忘れて張り切って仕事をし、<大野>にたいしてさえ愛想好く話しかけるような度胸も持つようになったからである。

第三の場面は、<吉岡>が社長の姪<マリ子>と結婚し、手がたく幸福を掴んだ時、ハンセン氏病病院の<ミツ>に手紙を出す場面である。

彼は新婚旅行先で、<ミツ>の入っている御殿場の病院を通りすぎながら「俺は幸福だとぼくは思った。そしてこの小さな幸福に関係のないこと、そこに暗い影をおとすようなことは、自分にはいっさい無縁にしよう」と考えたのであるが、彼はどうしてハンセン氏病病院の<ミツ>に再び連絡をとったのだろうか。

年末、獨り暮らしの今まで年賀状を出したことのない<吉岡>は、妻になった<マリ子>に「仲人や世話になった人にきちんと挨拶をしておかないと、失禮な夫婦だと思われたくない」といわれ、年賀状を書いていた。彼の新世帯の目黒のアパートには學生時代の下宿とちがって、綺麗な簞笥も、鏡臺もあり、和服をきた<マリ子>が白い腕をだして、墨をすっている。彼はとうとう望んでいた幸福を掴んだのである。その幸福の時にわざと避けようとした<ミツ>の名がふと浮かんできたのである。

第一・第二の場面までの<吉岡>は、<ミツ>を利用するための行動を示している。しかし、第三の場面においては、自分の幸福にかえて邪魔になるはずの<ミツ>に連絡をとっている。<ミツ>への年賀状の内容は「謹賀新年、病気の回復を祈る」という、ただそれだけの内容であったが、その行為の中からは色々な意味合いが汲み取れると思う。

以上、探ってみた<吉岡>の生き方は、<吉岡>自身も「人並み以上に自分が腹黒く、狡猾な男ではない」(p.103)とまっているように、世間並のありふれた男性のものとあまり變りはないものである。しかし、<吉岡>の次の告白をみると彼の變わった「切實な心像」を窺うことができる。

ぼくは知らなかったのだ。ぼくたちの人生では、他人にたいするどんな行為でも、太陽の下で水が溶けるように、消えるのではないことを。ぼくたちがその相手から遠ざかり、全く思いださないようになって、ぼくらの行為は、心のふかい奥底に痕跡をのこさずには消えないことを知らなかったのだ。(p.103)

何が<吉岡>をそういう心像にかえらせたのであろうか。9) 彼の心像の中には、「鼻持ちならぬ感傷癖」の女だった彼女が聖女として据えられている。次の節で<森田ミツ>の生き方を探りながらその疑問點に接近してみよう。

『わたしが・棄てた・女』という作品の意義は、ほかならぬ、「<吉岡>のように極めて凡庸な男の眼を通して、平凡な<ミツ>を聖女にまで描き上げたところ」にあるからである。

### 4-3. <森田ミツ>の場合

本作品のテーマに沿って考えるならば、語り手の<吉岡>よりは、<ミツ>の「生き方」にその焦點が合わされていると言える。何故なら<吉岡>が「偶然の出会い」によって巡り合った<ミツ>という女は、最初「東京の場末のどこにでも見かけられる顔」の持ち主であったが、最後は「ぼくは今あの女を聖女だと思っている」と思わせ、彼の人生の在り方も變えたからである。<ミツ>の何が彼をそういうふうにし、變わらせたのであろうか。

本節では、この「ありきたりの平凡な」人物<ミツ>の生き方を探りながら、そういう疑問點に接近して行こうと思う。

<ミツ>の生涯を辿っていくと、四つの場面が浮き彫りにされる。その第一は、小兒麻

---

9) <吉岡>は、<ミツ>とのことを回想しながら、次のように語っている。テキスト pp.254-255：‘もし、ミツがぼくに何か教えたとするならば、それは、ぼくらの人生をたった一度でも横切るものは、そこに消すことのできぬ痕跡を残すということなのか。寂しさは、その痕跡からくるのだろうか。そして亦、もし、この修道女が信じている、神というものが本當にあるならば、神はそうした痕跡を通して、ぼくらに話しかけるのか。しかしこの寂しさは何處からくるのだろうか。’

痺の<吉岡>への憐憫の情のため、純潔を與える場面、第二、會社の同僚田口の奥さんに夜勤のお金をあげる場面、第三、御殿場行きの列車の中で、病人のお爺さんに席を譲ってあげる場面、第四、ハンセン氏病病院での奉仕と死にいたる場面である。

まず、第一の場面は、<吉岡>の旅館への誘惑も強情に拒んだ<ミツ>が、小兒麻痺の後遺症の烈しい痛みのため呻き聲をあげている<吉岡>に、心を許す場面である。

「どうしたの。あんた。」

「びっこだよ。女にももてねえびっこだよ。」

「可愛そう……」突然、彼女は姉のようにぼくの掌を自分の二つの掌のなかにはきんだ。」

「結構だ。同情してもらわなくても。」

「あんた。あんなとこ、何度も行ったの。」

「行く筈がないじゃないか。女にもてねえびっこが…… だから今日、君が俺を好いてくれたと思ったから…… 始めて、…… ああ、そうかと…… 思ったんだ…… 」

安っぽい映畫に安っぽいやくざが使うようなセリフをぼくは平氣でしゃべっていた。別になにも考えず、ただ偽惡的な氣持で口にだしたにすぎなかった。しかしこのウソの言葉がはじめてミツの心を捉えたのである。

「そうだったん…… そんなら…… そんなら連れてって…… さっきのところに。」

(pp.46-47)

この場面で<ミツ>が<吉岡>に對して抱いたのは憐憫の情であろう。<吉岡>は、これを機會に、<ミツ>の同情を引くため、自分はびっこだから女に好かれたことがないという悲しみを装った言葉を漏らす。ここで、<ミツ>の心は、急に傾きはじめるのである。他人の不幸にじっといられないこの性分は、本作品の終りまで<ミツ>を一貫して支えている感情である。<吉岡>にも一瞬の憐憫は持てるものの、それは彼の人生においてみればつかの間の感情にすぎないもので、實行を伴う<ミツ>の憐憫の情とは大きな隔たりが感じられる。

第二の場面は、田口という同僚の妻が勤め先の工場に給料を貰いにたずねてきたときである。

人間の人生を悲しそうにじっと眺めている一つのくたびれた顔がミツに囁くのだ。

(ねえ。引きかえしてくれないか…… お前が持っているそのお金が、あの子と母親とを助けるんだよ。)

(でも。)とミツは一生懸命、その聲に抗う。(でも、あたしは毎晩、働いたっどもん。一生懸命、働いたっどもん。)

(わかってるよ。)と悲しそうに言う。(わかっている。わたしはお前がどんなにカーディ

ガンがほしいか、どんなに働いたかもみんな知っているよ。だからそのお前にたのむのだ。カーディガンかわりに、あの子と母親にお前がその千円を使ってくれるようにたのむのだよ。)

(イヤだなア。だってこれは田口さんの責任でしょ。)(責任なんかより、もっと大切なことがあるよ。この人生で必要なのはお前の悲しみを他人の悲しみに結びあわすことなのだ。そして私の十字架はそのためにある。)(pp.88-89)

田口は、<ミツ>と同じ会社の同僚ではあるが、賭博や酒で給料の大半を空費してしまっている。二人の子供をかかえた田口の女房は、そのために生活に飢えている。明日學校に納めなければならぬ子供の給食費さえ夫から貰えないのだ。ミツの心はその女のほうに心が傾いていく。ミツのふところには、買いたいカーディガンと<吉岡>へのプレゼントのために辛い夜勤で稼いだ千円が入っている。それさえあれば田口の女房は明日をきりぬけることができるのである。しかし、大學生の<吉岡>に綺麗に見せたい気持もはたらし、ほしくてたまらなくなったカーディガン、また穴のできた靴下をはいていた<吉岡>のことを思い、その同情を躊躇し拒否しようとする。

しかし、<ミツ>は、「人生を悲しそうにじっと眺めている一つのくたびれた顔」の主の囁きに従って、自分の夢を捨てて田口の妻と子供にお金を与えるのである。その聲は、「人生で必要なのはお前の悲しみを他人の悲しみに結びあわすことなのだ。そして私の十字架はそのためにある」と<ミツ>の心を動かし、十字架の意味は理解できなくても彼女は無意識のうちに愛の行爲を施す。「だれかが不幸せなのは悲しい。地上の誰かが辛がっているのは悲しい」という<ミツ>の心像は、他人の<悲しみへの連帯感>にほかならないものである。10)

第三の場面は、神山というハンセン氏病院のある御殿場行きの列車の中で、病人のお爺さんに席を譲ってあげる場面である。

「このお爺ちゃんが病氣なんですよ。」

「すみませんが、だれか……」

他の乗客と同じようにミツも眼をつむり、その声を聞くまいとしていた。悲惨な砂漠のように彼女の感情をひあがらせていた。一切れのパンをまだ持っている人間が、全く飢えた者に要求する権利がなく、飢えきった者が相手に与えることを拒んだとしてもそれは無理のないことだった。

---

10) 第三の場面と同じような場面はもう一カ所ある。テキスト pp.146-147

<ミツ>は、川崎パチンコ屋で同じ勤め先だった馬場さんのくすねたお金の辯償のためパチンコ屋から追い出され、酒場まで落ちていく。<吉岡>は、他人のやった罪までひっかぶって、自分の運命を狂わしている<ミツ>の人のよさはわかっているものの、「あれじゃ、どうにもなるまいな」と思う。

(今日だけは放っといてよ。)ミツは両手で傘の柄を握りながら呟いた。(お爺ちゃんよ、あたしのほうが、もっとわるいのよ。あたしだって、疲れているんだもん。)<省略>  
「あのね……あそこにね、坐っていいんですよ。」(pp.178-179)

<ミツ>は、自分は今、世の中に一人ぼっちになり、人生とよぶ路の中で、すべてが終わったのだという絶望が體を打ちのめしている心境で列車に乗っている。自分の病名がほかならぬ「かったい」と呼ばれるハンセン氏病であるからである。彼女にとって一人ぼっちとは過去の楽しかった思い出とさえ別れをつける事でもある。しかし彼女は今一人ぼっちであるだけでなく、病んだ犬よりももっとミジメで見捨てられていることもはっきり知っている。にもかかわらず、彼女はいつもと同じように病んでいる老人のような人間を見ると言いようのない悲しみがこみあげてくるのを覚え、お人好しの感情を顔にあらわしてしまうのである。11)

第四の場面は、ハンセン氏病院での<ミツ>の生き方である。ここでの彼女の生への姿勢をみると、彼女の性分が今までよりも一層鮮明にあらわれている。

<ミツ>は、ハンセン氏病院で患者としての生活を強いられてきたが、三週間も過ぎたある日、それは大學病院の誤診であることが判明する。

(あたしは病気じゃない。あたしは病気じゃない。)

病舎の外のまぶしい陽光が彼女の顔にあたった。その陽光と爽やかな空気を五體を思いきり伸ばし、ミツは胸いっぱい吸いこんだ。生きていること、病気でないことがこんなに素晴らしいものであると今まで彼女は知らなかった。陽の光がこんなに美しく、空気の味がこんなに甘いとは今まで知らなかった。(p.217)

悦びに包まれた<ミツ>の氣持がすぐ伝わってくるようなこの文章は、神の恩寵と復活の場面を連想させる。しかし、<ミツ>は、地球の荒涼たる果てだと思っていたこの病院に居残っている。それは、昨日まで何も氣兼ねせずに<ミツ>にやさしく話しかけたり、刺繡を教えてくれたりした人たちを裏切ったような氣がし、自分は悪い女だと思ったからである。三週間同じ部屋を使っていた姉のような加納たえ子、彼女は別れていく<ミツ>に背をむけ肩を震わせながら泣くのをこらえていた。また女の患者たちは、細目にあけた窓硝子から、羨望と妬みのこもる眼で眺めていた。ここでの生活にどんな苦しみやどんな

11) <ミツ>のこういう可哀想な人への本能的な憐憫は、子供の時から変わらない性分である。作品の中では、死んだ母との川崎の大師さまにお参りした時のことや新しい母との生活のことが回想の形で書かれている。お参りの時は、石段で五本の指のないハンセン氏病の乞食の惨めな姿をみて泣き出したくなり、怖がりながらも乞食に錢がやりたくてたまらない心情になる。また、新しい母と腹違いの妹・弟らが自分のため不幸せなのだと思い、氣を使って自ら家を出てしまったのである。

眠れぬ夜があるかもわかりきっている<ミツ>の心は、痛さに耐えかねたのである。だから<ミツ>が、ハンセン氏病病院に戻ってきた一番大きな理由は、どんな苦しみも、一人ぼっちという孤獨の絶望にまさるものはないということを身をもって知り、そういう境遇に陥っている病院の患者たちの苦しみを分かち合うためであると言える。

再び病院で生活を始めた<ミツ>は、好きな流行歌を歌いながら悦びの中で、配膳や臺所の支度をしたり、また患者が作った農作物や刺繍などを御殿場の商店に賣りに行ったりする。流行歌以外に、彼女の好きなのは、映畫である。病院では月に一度、御殿場の映畫館からフィルムをかりて患者に見せてくれている。その日になると朝からそわそわして、落ちつきがなくなり、一番大聲をあげて騒ぐくらいである。そのように好きな映畫なのに、<ミツ>は患者さんたちのことが氣になって、自分一人では絶対に病院の外の映畫館には行かない。<sup>12)</sup>

<ミツ>の場合、こういう行爲は、ほとんど自發的に出るようである。それは小兒患者の莊ちゃんという六つになる子供が肺炎になった時の、彼女の獻身的な看病ぶりにもよくあらわれている。莊ちゃんは既に神經までハンセン氏病に犯されており、その上、急性の肺炎のため、ほとんど絶望的な状態になっている。<ミツ>は、三日間ほとんど寝ないで付添っていたため、顔もげっそりとし眼なども充血してくる。修道女<山形>は、<ミツ>に自分の部屋に戻るように、強く言わなければならなかったほどである。

「でも、あたしじゃなければ、莊ちゃん、ダメなの。」

氷嚢袋の氷を割りながら、彼女は首をふりました。霜焼けのできたミツちゃんの手が、青紫にふくれあがっていました。

「大丈夫よ。私たちがやるから。第一、あんたがまいっちゃうじゃない。」

そう申しますと、

「あたしね、昨晚、莊ちゃんを助けてくれるなら、そのかわり、あたしが癩病になってもいいと祈ったわ。本當よ。」(p.249)

<山形>は、この娘なら本氣で手を組みあわせ、つめたい木造病棟の床にひざまずいて、莊ちゃんが助かるなら、自分がどんなに苦しくても辛抱すると、祈ったに違いないと<吉岡>への手紙の中で語っている。それは病院での彼女の生活が、何時も他人への「悲しみへの連帶感」で結ばれ、自然に愛の行爲を實踐していたからである。このようなく<ミツ>の素直な愛の行爲は、彼女の最後の死の瞬間にもよくあらわれている。

<ミツ>の死は、御殿場までお使いにいった12月20日に不意に訪れてきたのである。彼

12) 関連の場面は、テキスト p.247 にある。

‘彼女は當惑したような顔をして、「患者さんたちは映畫、ほかの場所ではみられないでしょ。あたし一人で行けば……行けない患者さんたちに可哀想だもん。’

女のその日の用事は、作業でできた卵と刺繍とを御殿場の理解ある店におさめてお金に替え、それを患者さんのお小遣いにするためである。患者さんのつくった鶏卵箱を両手で大事にかかえて、御殿場驛の廣場を横切ろうとした時、バックしてきたトラックに横から倒されたのである。「卵、卵」意識がなくなるまで、<ミツ>は卵のことばかり言っていたそうである。<山形>は、もしその時手に何も持っていなかったなら素早く體を動かして助かったかも知れない、と悲しみに沈んだ。<ミツ>は不自由な體と神経のきかない手で飼った卵が、自分の命取りの危険な瞬間にも頭から離れなかったと思われる。四時間も長く昏睡の中でも何かを探すように手を動かし、人への憎しみや罵聲どころか、「さいなら、吉岡さん。」という言葉だけで、<吉岡>への切なさや懐かしさをこめた一言だけ發して、息を引取ったのである。13)

このようなくミツ>の生き方は、平凡な娘が歩み續けてきた「悲しみの道」であり、それはほかならぬ彼女自身の「自己聖化への道」であると言えよう。14)

## 4. おわり

『わたしが・棄てた・女』という作品は、特異なタイトル表記として單語と單語との間に二つの点が入っている。『わたしが棄てた女』ではなく、『わたしが・棄てた・女』であることは、どういう意味合いを持っているのであろうか。

私としては、一つの文章ではなく、「わたしが・棄てた・女」は、一つの單語を他の單語に置き換えられるという餘韻を與えてくれるのではないかと思われる。本作品を読み終わった後、それは、「わたしが・棄てた・信仰」「あなたが・棄てた・十字架」「わたしが・棄てられなかった・人への痕跡」「神が・棄てた・子供」「わたしが・忘れた・眞の愛」等々、次から次へと本作品のメッセージから訴えられる單語を置き換えることができたからである。この單語の間の點は、タイトルの三つの單語を各々獨立した一つの單語として

13) しかし、天使のような心主の<ミツ>も、たった一度怒った時があった。テキスト p.250

莊ちゃんが死んだ時、「あたし、神さまなど、あると、思わない。そんなもん、あるもんですか。」「子供たちをいじめるものを、信じたくないわよ。」と。小さな拳をふりあげている<ミツ>の姿がありありと浮かんでくる。神は、だれよりも子供のようになることを命じられたが、何の罪もない子供は病に苦しんで死んでいく。そこにはどういう「大きな意味」が隠されているのだろうか。それは、カトリック作家遠藤の神への切ない問いであろう。

14) <ミツ>の「自己聖化」への道を象徴的に表わした言葉には、「夕陽の光」がある。テキスト p.235

それは、<ミツ>自身の意志で病院にもどった時、ハンセン氏病患者の墓のある雑木林にふり注いでいた光である。‘ミツはその落日の光を背にうけながら林のふちに立ちどまった。あれほど嫌悪をもって眺めたこの風景がミツには今、自分の故郷に戻ったような懐かしさを起こさせた。林の一本の樹に靠れて森田ミツはその懐かしさを心の中で噛みしめながら、夕陽の光の束を見あげた。’

動かし、多角度から作品の世界をてらしだすことのできる機能を持っていると思われる。

タイトルから読者の想像力を呼び起こす『わたしが・棄てた・女』は、作品の舞臺や人物においても、日本人に親しみやすい澁谷、目黒、代々木、世田谷、川崎、下北澤などを選び、平凡なく吉岡>と<ミツ>を主人公とすることで、読者をすぐ小説世界に引き込んでしまう。かかる効果的な設定によって、唯一神の神の物語が、汎神論世界の読者に違和感なく受け入れられたと思われる。カトリック作家遠藤は、あまりに日本的な日常の生活のなかで、「もし、神が存在するならば」、変わってくる、また新しく見えてくるはずの何かを、輕小説である本作品においても探し求めているのである。それは、神の存在証明に他ならないもので、作家は本作品の主人公<ミツ>の生き方を通して、神の眼差しを證として描き出そうとしたのである。

この作品にでてくる一つのくたびれた聲は<ミツ>に、「この人生で必要なのはお前の悲しみを他人の悲しみに結びあわすことで、私の十字架はそのためにある」と囁いている。不幸な人の中にはお互いが不幸という結び付きがあり、この不幸や涙には、必ず大きな意味があること、またその苦しみを分かち合ってくれる存在が必ず付き添っていることを、死の瞬間まで愛の行爲を實踐した<ミツ>の生き方を通して物語っている。

修道女<山形>は<ミツ>について、<吉岡>への手紙の中で次のように書いている。

私はさきほど愛徳とは、一時のみじめな者にたいする感傷や憐憫ではなく、忍耐と努力の行爲だと生意氣なことを申しましたが、ミッチャンには私たちのように、こうした努力や忍耐を必要としないほど、苦しむ人々にすぐ自分を合わせられるのでした。いいえ、ミッチャンの愛徳に、努力や忍耐がなかったと言うものではありません。彼女の場合には、愛徳の行爲にわざとらしさが少しも見えなかったのです。(pp.247-248)

「汝、幼子のごとく非んば…」という聖書の言葉のように、單純で素直な愛の行爲を無意識のうちに實踐する<ミツ>こそ、神は愛し給うのではないかと思う。だから<ツール・山形>はこう書いている。「もしも神が私に一番、好きな人間はときかれたなら、私は即座にこう答えるでしょう。ミッチャンのような人と。もし神が私に、どういう人間になりたいかと言われれば、私は即座に答えるでしょう。ミッチャンのような人と。」

<吉岡>が、彼女から教えられたことは、「我々の人生は、偶然の重なりによって成り立っているものの、それは必然的な偶然のできことであり、もし神というものがあるならば、ありきたりに見える日常の生活のなかに存在し、働きかけている」ということである。

だから、作品『わたしが・棄てた・女』に描かれている<ミツ>の生き方は、神が人間に語りかけるような生き方であり、<吉岡>に平凡な女を聖女とまで思わせた「自己聖化」への

崇高な生き方でもあると言える。

言い換えれば、「悲しみへの連帯」による<ミツ>の生き方こそ、作家遠藤が絶え間なく追求した「愛の同伴者イエス」の存在証明にほかならないものであると言えよう。

## 【参考文献】

- ・ 遠藤周作 『わたしが・棄てた・女』 講談社 1975.9
- ・ ジュヌヴィエーヴ・パストル 「妹フランソワーズと遠藤周作」  
「三田文学」 秋季号 1999 pp.136-157
- ・ 遠藤周作文学全集第十二巻 評論・エッセイ I 『わたしが・棄てた・女』 新潮社 2000.4 p.225
- ・ 遠藤周作文学全集第十二巻 評論・エッセイ I 『ハンセン氏病病院』 新潮社 2000.4 p.328
- ・ 遠藤周作文学全集第十五巻 日記・年譜・著作目録 『滞佛日記(一九五二年九月～一九五三年一月)』 新潮社 2000.10 pp.225-256

K C I

## 要 旨

遠藤の作品世界には、「純文學」・「大衆文學」を問わず、カトリック作家としての一貫したテーマ—〈日本人にとっての神の存在〉と〈日本におけるキリスト教〉—が探り求められている。それは、普遍的なカトリック精神に基づいた母性的な「愛の神の存在証明」にほかならないものである。

特に、『わたしが・棄てた・女』には、作家の青春時代のハンセン氏病病院の訪問やフランス人女性〈フラソワーズ〉との戀愛體驗が色濃く投影されている。遠藤が、文學的生涯を通して語りつづけてきた、「愛とは棄てないこと、罪とは他人の人生を歪めてしまうこと」や、「人間は他人の人生に痕跡を残さずに交わることはできない」といった言葉は、かかる作家の切實な體驗からでてきたものであろう。

遠藤が、本作品の舞臺を、日本人に親しみやすい澁谷、目黒、代々木、世田谷、川崎、下北澤などに設定したことや、平凡なく吉岡〉と〈ミツ〉を主人公として登場させたことで、唯一神の神の物語が、汎神論世界の讀者に違和感なく受け入れられるようになったと思われる。あまりに日本的な日常の生活のなかで、「もし、神が存在するならば」、變わってくる、また新しく見えてくるはずの何かを、〈ミツ〉の生き方を通して、神の眼差しを證として描き出そうとしたのである。

だから、単純で素直な愛の行爲を無意識のうちに實踐する〈ミツ〉の生き方こそ、神が人間に語りかけるような生き方であり、〈吉岡〉に平凡な女を聖女とまで思わせた「自己聖化」への崇高な生き方でもある。

言い換えれば、「悲しみへの連帶」による〈ミツ〉の生き方は、作家遠藤が絶え間なく追求した「愛の同伴者イエス」の存在証明にほかならないものであると言えよう。

キーワード：大衆文學、輕小説、愛、神、同伴者イエス、十字架、  
唯一神、女、人生

투 고 : 2005. 2. 28  
1차 심사 : 2005. 3. 12  
2차 심사 : 2005. 4. 2

住 所 : (300-716) 대전광역시 동구 용운동 96-3 대전대학교 일어일문학과  
電 話 : (042) 280-2257  
e-mail : yookgh@dju.ac.kr